

心理学の発展編 2009

～T 教授の観察ノートから～

2009.5.5 タツノオトシゴ



C.G.ユングと S.フロイトの出会いが心理学を大きく発展させました。この合宿から丁度 20 年後の 1907 年、ユングがフロイトをウィーンに訪問しました。ユング 32 歳、フロイト 51 歳のときでした。

ユングが 25 歳で精神病院の助手をしていた時、フロイトの研究成果「夢判断」が出版され、病院の院長の勧めもあり、フロイトの研究を知りました。ユングは夢を通して人の無意識を探るフロイトの手法に感銘を受け、そして、自分の研究成果「診断的連想研究」を出版するとフロイトに贈呈したのです。フロイトは新進気鋭の精神科医ユングが自分を慕ってくれることに喜び、二人は文通を続けました。1907 年、ユングがフロイトをウィーンに訪問したのです。ユングも出会いに感動し、フロイトも優秀な後輩から慕われ尊敬されることに無上の喜びを感じました。その背景にはフロイトの「性理論」が当時の精神医学会で評価されず異端扱いされていたこともあったのでしょう。フロイトはその後ユングを後継者として考え、極端に特別扱いをしたほどです。例えば「国際精神分析学会」の初代会長にユングを就かせました。ユングの気持は息子が父親を慕う気持と同じだったと推測されます。何故ならユングの実の父親は弱々しい頼りがいの無いタイプだったのに対し、フロイトは「理想の父親」に映ったのです。

さて物語もラストバッター、今夜の発表者「由佳さん」がテーブル中央に登場です。以前、母親の奇行を T 教授に打ち明けた時、教授は目を細めながら、「その夢の話、何処かへメモしておいて欲しいのだが・・・、別の機会に改めて聴く事があると思う。」と話していました。まさに、今日がその日だったのです。(^^)

皆の視線を感じながら、由佳さんはゆっくりと夢の話を始めました。中々寝付けないときのイライラは、寝ようと思えば思うほどに寝られないものです。そんなときに、ふと違う事を思い浮かべると、そのまま夢の中に入っていることがあります。由佳さんの場合、夢に出てくる大男、大きな体を持ち力持ちの男は、『父親』の理想形です。そして部屋のカーテンや壁紙には、乳児期の思い出が一杯詰まっています。



<夢の中の世界では、お花が綺麗に咲いています>

つい先ほどの、午後の賑やかな情景を思い出しながら、過去に同じような時間を経験したような感情が、心の奥底から湧き上がってきます。過去の何処かで経験したある場面が、つい先ほどの午後の時間との共時性として思い出されます。あのティーカップも、片付けをするサマンサの後ろ姿も、遠い記憶の何処かで知っていた自分がいます。そうです、井戸の底から見上げる天井の丸い光は、まるで夜空に輝く月のように冷たく、遠ざかっていく希望を暗示しているのです。井戸端会議の中に母親の声が聞こえ、其処には阻害された私がいるのです。手招きされ、その先にある別の世界が、逃避していく由佳さんを待ち受けているのです。



C.G.ユングによって提唱されたシンクロシティ (Synchronicity) という概念があります。それは、意味のある偶然の一致を表し、非因果的な複数の事象 (出来事) の生起を決定する法則原理として、従来知られていた「因果性」とは異なる原理なのでしょう。何か複数の事象が、「意味・イメージ」において「類似性・近接性」を備える時、その事象が、時空間の秩序で規定されているこの世界の中で、従来の因果性では、何の関係も持たない場合でも、随伴して現象・生起する場合、これを、シンクロシティの作用と見做し、日本では共時性 (きょうじせい) とも言われています。

強い父親像は、現在の社会ではほとんど見られなくなりました。しかし、群れ集団を率いるオスにとって全てが自分の所有物であり、それ以外のオスは群れから追放されたり、打ち殺される運命にあるのです。しかし、群れから追放された兄弟集団が、団結して父親に立ち向かい殺害し、残された兄弟間での権力争いの末、社会的な和睦 (協定) を結ぶという世界も出現し、自分達が父親と同じように母や姉妹を所有する事を放棄する方向が見出されてきたことが、道徳と法制度が現れる端緒という説も頷けます。(^^)

庇護の世界から飛び出し、未知の世界へ手招きされる中、自らその世界に飛び込んで行く背景には、自己否定の感情も混じっているようです。井戸の中に落ちていく自分が夢の中にいることを自覚し、しかも、その井戸端で話をしている声の中に“母親”の声が聞こえているのですから、どちらが現実で、どちらが夢かも認識しにくい領域です。言えることは、そこに阻害されている自分自身が居るということでしょう。



頭上にある明るく小さな光は、まだ手に届かない希望を示しています。

由佳さんは、まるで誰かに取り付かれたように一気に話し終わった感じです。部屋を見渡せば、他のメンバーもグッタリと疲れ切った顔をしています。おや、気が付けば、先ほどから TICA さんと T 教授の姿が見当たりません。サマンサが「先ほど、『チョッと外の空気に触れてくる』と仰って出て行かれましたが……」S 婦人も、「何か重苦しい空気がみなぎっているようね。少し窓でも開けませんこと？」と他のメンバーに促しています。

<T 教授のメモより>

由佳さんの話を聞いているうちに、TICA の顔色が悪くなってきたので、他のメンバーには言わずに外のテラスへ出た。TICA が『由佳さんは私の夢を何処で知ったのかしら?』というその言葉が不思議な響きを持っていた。

二人の間には、何か共通する部分がある事には気付いていたが、それは一体何なのだろう？



<今回はコフートの自己心理学に関連する HP から>

S.フロイトから娘の A.フロイト、メラニー・クラインといった人たちは、赤ちゃんが自分自身を外界の恐怖や脅威から自分を守る為に、**原始的な防衛機制**を用いると考えました。原始的な防衛機制として最も重要なものは、メラニー・クラインが発見した**“投影性同一視 (projective identification)”**と**“分裂(splitting)”**ですが、その他にも取り入れ、否定、否認など幾つかの原始的防衛機制が定義されています。これらの原始的防衛機制に共通する特徴と機能は、“**現実原則の考慮の欠如**”であり、もう一つは“**母親からの分離—個体化**”への正当な評価がなされず、自己の外部の人に対しての**対象恒常性が欠如**していることです。

これらの防衛機制は、境界例の精神分析や幼児の児童分析を通して見出されたものが多いことから、小学生以上の発達年齢で原始的な防衛機制を頻繁に用い、現実認識能力の低下や幼児退行的な自閉性が見られる場合には、境界性人格障害の病理性や発達障害などの可能性を考えなければいけません。

コフートによれば、赤ちゃんの攻撃性や衝動性は純粋な本能ではなく、思い通りにいかない自己対象（母親・養育者）との関わりの中で学習され、その時の**自己愛的憤怒**が攻撃欲求の起源となっていると考えます。フロイトの赤ちゃんに対する認識は、どちらかというとなり無力で自他未分離な不安定な精神状態にあり、全面的に親の世話と愛情に依存するだけの受動的な存在というものですが、コフートは、赤ちゃんにも母親に向かって積極的に働きかける能動的な面があり、“**アサーティブ（自己開示）の能力**”の芽生えも見られるとしました。伝統的な精神分析では、去勢不安を伴うエディプス・コンプレックス（異性の親への性衝動・独占欲と同性の親への嫉妬・敵対心）が強化されてくる4～6歳の時期を将来の精神的健康を左右する非常に大切な時期だと考え、自由連想法や夢分析の技法では、このエディプス期の情緒的葛藤や混乱を心的外傷（トラウマ）の遠因として解釈することが多くなっています。

コフートの自己心理学では、エディプス・コンプレックスの克服やトラウマをそれほど重視せず、異性の親を独占しようとしたことで同性の親から懲罰を受けるとか迫害されるといった去勢不安も一般的なものではないとします。また、男性の去勢不安と対置される女性のペニス羨望（男性性と権力欲求のメタファーとしての男根羨望）なども、客観的根拠のないファンタジーとして退ける立場です。自己心理学がエディプス期に重視する心理的発達課題は、自他未分離な母親との幻想的一体感を克服した**子どもの健全な自尊心や自己肯定感の成長**であり、その成長を親（養育者）が促進するには、愛情と優しさに満ちたコミュニケーションや子どもの自発性や積極性を尊重して承認するようなアプローチが大切になってくるのです。

コフートは、エディプス期に生じる去勢不安のようなものを重視しませんが、エディプス期が心理的不安のない安定した時期、障害の少ない時期だと考えてもいません。エディプス期の発達上の問題は、自己対象（自分と近い関係にある大切な人たち）が非共感的な対応をすることで、自己の統合性が乱されて断片化することで解離的な状態に陥る危険があることです。

また、適度な強さや程度の自尊感情を抱くことが出来なくなると、様々な事柄・課題に対して消極的になり、対人関係からひきこもりがちになって社会生活（学校生活）に支障が出てくる事もあります。この時期に達成すべき心理的課題は、適切な強度と耐久力のある自尊感情と自信の成長であり、自己肯定感をもって、失敗や間違いを恐れずに色々な課題や問題に積極的にチャレンジしてみる事なのです。そうした四苦八苦の試行錯誤と七転八倒の努力を繰り返す中で、子どもは自分自身の能力の特性と可能性を認識して、友達と競い合ったり助け合ったりしながら、自己の長所を伸ばさせ、自己の短所を改善させていく事となります。子ども達が、学校などの集団活動に適応し、自分の力や可能性を伸ばしていくには、安定した精神状態と自分の存在と能力に対する肯定的な自覚が必要となりますが、身近な家族から自分が承認されて受け容れられているという実感を持つことが出来れば、外部の世界でも自己肯定感情を持ちやすくなるのです。何故、子ども達は自分の両親や兄弟から尊重されて理解されることを求めるのでしょうか？何故、健全な精神の発達や情緒の安定の為には、身近な他者の承認や肯定が必要で、温かく見守ってくれる優しい眼差しがなければ不安や恐怖を感じるのでしょうか？この問いに対する答えは、本当は極めて自明な事であり、言葉で論理的に説明できなくても誰もが実際の生活体験の中で『**身近な人の愛情や信頼の大切さ**』を実感しています。また、未成熟な子どもではない十分に自立した大人であっても、身近な他者である家族や配偶者、恋人、友人から尊重され理解されることは生きていく上で欠かす事が出来ません。

自己心理学においてコフートが人間の精神的健康を維持する最大の要因として想定したのは、『**自己対象の肯定・尊重・受容の態度**』であり、私たちは日常生活の様々な感情体験の中でその事を深く実感することが出来ます。コフートのいう“**自己対象(self-object)**”とは、“主体性の中心的機能を担う自己”や“体験を認識する容器としての自己”とは全く異なる概念であり、自己対象とは『**自己の一部として感じられるような大切な他者・自己の一部として機能しているような重要な他者**』を意味する概念です。

では次回、S 婦人と過ごす最終日、名残惜しい気もします…